

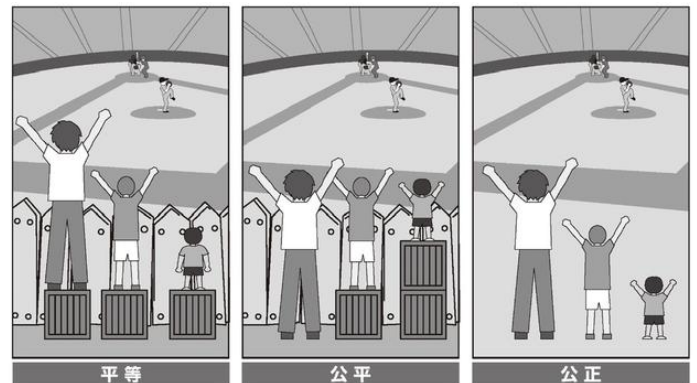
知覚動考

寒河江市立南部小学校
校長室通信
校長 白田 敏幸

～「誰一人取り残さない 子供の可能性を引き出す学校づくり」～

「平等」から「公正」へ — 子供たちの真の輝きを目指して —

さて、右のイラスト、すでにご存知の方も多いかと思います。これからの学校教育を考える上で、私たちが常に立ち返るべき「視点」がここに示されています。



3つの言葉の違いを考える

「平等」：全員に同じものを与える

左の図では、身長に関わらず同じ台を配っています。一見公平に見えますが、背の低い子は試合を見ることができません。形式的な平等は時に格差を放置することになります。

「公平」：必要な人に、必要な分だけ与える

真ん中の図では、背の低い子に台を2つ渡し、全員が試合を見られるようにしています。一人一人の状況に合わせた「個別最適な支援」の形です。

「公正」：障壁そのものを取り除く

そして一番右の図。そもそも試合を遮っていた「不透明な塀」を取り払い、フェンスに変えています。台（支援）がなくても、誰もが自分の力で試合を楽しむことができます。これが「公正」です。

「公正」な教育への転換

これまでの学校教育では、真ん中の「公平」を目指し、配慮が必要な子にどう「台」を継ぎ足すかに注力してきました。しかし、私たちが今取り組むべきは、右側の図にある「構造の見直し」ではないでしょうか。

子供たちが「台」なしでは参加できないような授業の進め方、行事のあり方、あるいは長年続いてきた慣習の中に、見えない「不透明な塀」が立っていないでしょうか。

【次ページへ】

今、私たちに求められていること

これからの教育において、私は皆さんと共に「**本当に必要なものを見極める**」作業を進めていきたいと考えています。

「当たり前」を疑う： 「昔からこうだったから」「今までやってきたから」という塀を取り払い、今の子供たちの実態に合わせる。

ユニバーサルデザインの視点： 特別な配慮を「後付け」するのではなく、最初から誰もが参加できる環境を設計する。

子供の視点に立つ： 大人の都合で作られたルールが、子供の成長を阻害していないかを見極める。

「台」を工夫する努力から、一歩進んで「塀」**そのものを問い直す**。
一人一人の子供が、自分の力でありのままに世界を見渡せる学校を、いっしょに創っていきましょう。